婦人指導者への抗議

与謝野晶子

私たち日本婦人は一九一九年において破天荒な刺戟を受けました。それは私たちが世界に触れると共に未来に触れたことです。久しく家庭と因習との窮屈な中に機械的の存在者であった私たちが、一躍して世界の生活に接触し、未来の生活理想と交渉するに到ったことは驚くべき激変と言わねばなりません。

その一九一九年も今は過去に属してしまいました。そして私たちがこの新春を迎えることは、最早見苦しい旧吾を重ねることでなくて、ひたすらみずみずしい新吾を自ら生むことであると思います。

私たちは久しい間の、過去の屈従し現状を維持する生活に飽き飽きしました。それは人間性の無限の発芽を圧抑して、唯だ非人格的の存在を続けるだけの生活でした。私たちは既に朧（おぼ）ろげながらにもせよ、人間として感ずべく知るべき事の幾分を感じかつ知りました。私たちの生活――ほんとうに生活の名に値する生活は文化価値を実現する過程そのものでなくてはなりません。私たちは現在が如何に不完全であっても、この現在の中に絶えず未来へ伸びる人格の芽を持っていることを自負します。この人格発展の可能を信じその実現に努力することに由って、現状を打破しつつ併せて未

来を招き寄せつつ、文化主義の生活の中に幾度も幾度も自己を自ら焚き、自ら新生したいと思います。

*

私たちは今、自己と周囲とをじっと正視します。私たちは迷信の徒でもなく、奴隷でもなく、人形や機械でもないのですから、あらゆる物事に自由討究と自由批判との眼を向けます。

そうして因習的な価値判断から一切を解放して、改めて新しい価値を、私たちのものである新しい合理的

標準に由って定め、すべての秩序を正しき価値に由って配列しようと努力します。いわゆる改造の順序は、第一に生活価値の改造、即ち新しい理想の発見であり、第二に生活様式の改造即ち新しい秩序の構成という順序でなくてはなりません。

*

私は生活の新しい理想を文化主義に発見し、生活を以て文化主義実現の過程とする者です。この事は既に他の機会で幾たびも述べました。従って私は、文化価

値から絶縁した一切の事件を悉く私たちの生活の目的と幸福とを裏切るものとして排斥します。名は如何に美くしそうであっても、その精神が文化価値を持たずもしくは文化価値を持つことが微弱なものであれば、私はそれを拒むことに厳正な態度を取ろうと思います。いわゆる「妥協」とは、この態度を曖昧にする臆病を意味する言葉だと思います。今は私たち一人でも生きて行くだけの確信があるのに、そのうえ世界の道理が国際的正義の名を以て私たちに味方し声援する時代です。私たち婦人は今更小鳥の如く臆病であってはならないと思います。

*

私は茲（ここ）に少しばかり、我国の婦人界における指導者側の婦人たちに対して不満に思う所を述べようと思います。最近において私たちを指導されるそれらの婦人たちが特に増加したのは、その婦人たちもまた時代思想の激変に驚いて覚醒されたためでしょうから、私たちはそれらの婦人たちの勇気と熱心とを尊敬すると共に、喜んでいろいろの指導を受けたいと期待しています。殊に私のようにすべてに教養の足りない者から見

ると、それらの婦人に多くの企て及びがたい長所を発見します。健康において、科学的知識において、文章と弁論において、活動的能力において、宣伝の実力において、細心な実際的施設において、一々私を驚嘆させます。私がいうまでもなく、新聞雑誌の読者は、それらの婦人を、教育界、宗教界、評論界等の各方面に発見されるでしょう。

　しかるに、それほど尊敬し、驚嘆している指導者たちのいずれに対しても、私が窃(ひそ)かに、最も大切な根本的な或物が欠けているという不満を感ぜねばならないのは、まことに遺憾千万なことだと思います。

＊

それらの婦人たちは、従来の引込思案な指導者たちとちがい、いろいろ啓蒙運動や社会運動に積極的の活動を示されています。家庭内職の実演展覧会を開かれる人たちがあれば、混食や代用食の実演会を開かれる人たちがあり、家庭改良の展覧会を開かれる人たちがあれば、婦人労働奨励の演説会を開かれる人たちがあり、婦人職業紹介の団体、廃物利用会、托児所、虚礼廃止同盟の会合等を作られる人たちもあります。

私が不満に感じるのは、それら婦人たちの運動が唯だそれらの活動だけに終始して、その活動の中にそれ以上の最も大切な或物を示されないからです。また、その活動の外に、それ以上の最も大切な或物を直接の目的とした活動を全く示されないからです。

*

私の言う「最も大切な或物」とは何でしょうか。一言にして言えば生活の理想です。言い換れば、それらの活動は唯だ目前の物質生活の利害のみを眼中に置い

ています。最も大切な文化生活の理想に照して、その価値を批判することが閑却されています。活動とはいえ、その実際は妄動に等しいものです。行き着く港を定めずに、激変しつつある時勢の荒浪の中に、無方針の航海を続けているのです。それらの指導者側の婦人たちは、私たちに対して自覚を叫ばれ、内省を奨(すす)められるのですが、私たちから見れば、自覚といい内省ということが何よりも「我々の生活の理想は如何(いかん)」という第一義的なことに向けられねばならないことを、かえってそれらの婦人たちは失念しておられるように思われます。

すべての活動は、それが文化価値実現の過程に役立つと否とに由って私たちの生活の内容となることが出来ます。文化生活の理想に由って批判されず精錬されない行為は、無駄と錯誤とが多く、中には反対に文化生活の創造を妨害するものさえあります。今後の生活が個人各自の自覚の上に立つ生活であらねばならぬというのは、この点に自覚することをいうのだと思います。

＊

私は少しく具体的に述べてそれらの先輩婦人たちに抗議します。指導者側のそれらの婦人たちの中の或人たちが、経済的労働を私たち婦人に奨励されるのを見ると、その目的が利殖の外に出でず、その方法が振売（ふりうり）商人の暴利を狙（ねら）う不正手段と大差のないものであるのに呆（あき）れます。例えば二円の資本で水菓子を工場の労働者に売って、一時間ほどの中に一円の純益を挙げるというような事を、得意になって私たちに教えられるのです。それは文化主義の理想と相容れない経済上の専制思想——即ち資本主義の思想であることに、その指導者が全く自覚を欠いておられることだと思います。

また或人たちが各種にわたる家庭の内職を紹介して婦人や小児に奨励されるのを見ると、その労銀の余りに低いことや、その仕事の余りに人間を過労させることや、殊に幼年期の子女までを昼夜にわたって時間の制限もなく座職の中に虐使することやについて、経済的、倫理的、人道的の顧慮が全く払われていないのです。その一例を言えば、玩具(おもちゃ)の「起き上り小法師(こぼし)」を材料は手前持ちで千個作って、得る所の賃銀は纔(わず)かに壱円二十銭です。また麻を心にして布をくけ附ける下駄の鼻緒は百足作って十六銭の賃銀が与えられるだけです。一千個の「起き上り小法師」、百足の鼻緒、それ

は大分の熟練をつまねば、家庭の婦人の手で一日に仕上げることは出来ないものでしょう。今日物価の騰貴に追随して、是非ともその賃銀だけの収入を得なければならないとすれば、一日十五、六時間の勤労を費して、それを仕上げるでしょう。ああ、この単調な、不愉快な、大量な、苦痛な長時間の労働、其処には物質に使役される人間の機械化、過労のための人格の圧殺があるばかりです。乏しい賃銀ながら、それに由って生物として飢餓線を守ることは出来るでしょう。しかし人格者としての生活は無残にも枯されてしまいます。文化生活に必要な精神的教養の余裕もなければ、自己

の天分に応じた独得の文化生活を創造する見込も全く断たれてしまいます。これが果して私たちのために望ましい家庭内職でしょうか。その指導者たる婦人たちは文化生活の理想について自覚がないために、その活動は、文化主義の敵である資本制度の下に盲従して、婦人や小児を賃銀奴隷の位地に堕落させるような意外な結果になっているのです。もしそれらの婦人たちの眼が生活の理想に向いて開いていたなら、そのような内職を無条件で取次ぐことなく、賃銀の値上を問屋に対して要求すると共に、内職の過労と人間の機械化とから解放されることを家庭の婦人たちに勧告されねば

ならないはずだと思います。全国の処女会に関係する指導者側の婦人たちが唯だ「強く働け」というような事ばかりを奨励されるのも、私から見れば何たる無自覚な言動であろうと浅ましく思われます。

*

また台所の構造の改良、廃物の利用、衣服の改良、混食代用食の奨励、贈答や送迎の廃止というようなことに努力される婦人たちについても、それが余りに局限された一部分の改革であって、今日の大局から見て、

或物は閑問題であり、或物は徒労問題であり、また或物は文化生活を裏切るものであるとさえ思われます。
飢饉時代でない限り、人間に向って不味な食物を以て辛抱せよと奨励することは、人間の本能を無視した不自然な行為です。人間の料理法は永い年月の経験で今日に及んだのですから、一朝にして人間の新しい嗜好を促すような混食や代用食が発明されようとは思われません。それに、混食や代用食の実行を以て今日の食料品の価格騰貴を切り抜けようとするのは全く見当違いです。物価の調節は政治問題であり、経済問題であり、また政治家と資本家との道徳問題、乃至人生

観の問題です。それらの方面に思い切った改革を要求せず、物価の暴騰を放任して置いて、唯だ大多数の経済的弱者である無産階級の人間に、その物質生活を退嬰(たいえい)し得るだけ退嬰せよ、飢えた動物のように如何なる不味(まず)い物でも取って露命だけを繋(つな)げというに等しい施設は愛をも聡明をも欠いた非人道的な施設だと思います。今日は一方に一人前の料理に百金を費す暴富階級が存在しているのです。それに対して一方に混食や代用食を取らねばならぬという大多数の人間のあるのは何たる偏頗(へんぱ)な社会状態でしょう。指導者たる婦人たちがこういう社会状態の矛盾と偏頗とに対して改造運

動を起すことなく、強い者の放縦と不仁非道とを許容して置いて、私たち無産階級の弱い者ばかりを、節倹や、過労や、減食や、粗食に由って機械と動物との位地にまで追い詰め、追い詰め、低下させようと努力されるのを見ると、私は文化生活の意義を自覚しない指導者たちを持つことの危険に戦慄します。

*

廃物利用奨励の愚挙であることはかつて別に述べましたが、贈答や送迎の廃止に熱中される婦人たちに対

しても、その事の徒労であるのを私は気の毒に思います。贈答には自（おのずか）ら限度があります。昔から贈答に由って家を亡し産を破ったという例を聞きません。それが物質的理由で出来なくなれば、各自が気が附いて止めずに置かない性質のものです。飲酒の害と同一に言われないものです。私は酒さえも絶対に禁じることに反対しています。贈答の弊害や浪費を注意するのは好いに違いありませんが、贈答や送迎を単に金銭や時間の利害ばかりで批判するのは、愛や趣味のような大切な人間性の発揚を無視した野蛮な行為です。動物や自然人には贈答や送迎の必要がないかも知れませんが、

こういう功利主義以上の感情生活を撥無して何処に文化人の生活があり得るでしょうか。私はそれらの婦人たちが進んで芸術の無用をさえ説かれるに到ることを怖れます。

世の中には、功利主義的の打算ばかりで生きて行かれない事もありませんから、買物帳をきちょうめんに附けたり、食べる物も食べず、自分と良人と子供との営養を削り取ってまで貯金の殖えることを楽みにして、唯だ口先ばかりで愛とか趣味とかを説き、他人の吉事に祝の品も贈らず、時々の音信に添えて珍しい物の贈答もせねば、他人の旅行に送迎を廃するというような

日送りも、それでその人たちの感情が満足される限り、その人たち自身の処世法としては自由であると思いますが、それを印刷物や手紙やで私たちにまで勧告されるに到っては迷惑千万だといわねばなりません。そのような非人情的な運動に、他人の感触を害してまで力瘤（ちからこぶ）を入れられる必要が何処にあるでしょうか。私は敢てそれを無駄なことだと断言します、私たちは経済的の打算ばかりで生きるには余りに自己の尊貴を知り過ぎました。

＊

私は、指導者側の婦人たちが自身を先ず一切の因習から解放することの運動——自己改造の運動——を経ないで置いて、言い換れば、自分自身は旧世界の遺物である物質主義、功利主義、常識主義の汚染を洗い落さずに置いて、この破天荒な世界改造の新時代、あらゆる価値の顚倒（てんとう）しつつある今日に、未来の生活方向の指導者として、私たち一般の婦人に、その時代錯誤の各種の運動を試みられることの矛盾を反省して頂きたいために、以上の直言を敢てしました。

それらの各種の運動が一時のお祭騒ぎでなく、如何

に真面目(まじめ)に熱心に起されても、文化主義の理想と一致する所がなければ、文化主義から絶縁し孤立した一種の遊戯行動であって、いずれも文化運動の体系には属さないものになってしまいます。私たちにはそれがあらずもがなの行為に見えます。そうしてそれらの無用乃至(ないし)有害な運動に、あたら精力を消耗される先輩婦人たちの徒労を惜みます。露骨にいえば、それらの低級な常識的、物質的、功利的の運動のみに忙しく暮されるる婦人たちは、どうしてそんな非文化的行動の中に生き甲斐を求められるのであろうかと不思議に思います。

＊

左右田博士は「文化主義の論理」という論文の中で「あるいはあるがままの状態に妥協をなして惰眠を貪（むさぼ）らんとする保守主義、退嬰（たいえい）主義、凡俗主義、常識主義、乃至（ないし）好都合主義や……単に物質的成功を以て文化に対する貢献なりと誤解し、煩瑣（はんさ）なる形式生活に追随するのみを知って人生の意義を解するを忘れたる物質主義素町人主義は皆排せざるべからず」といい、また「われらは道義のためにのみ生くるのではない。われらは常識の民としてのみ生くるのではない。いわんやわれ

らはいわゆる成功せんがためにのみ生くるのではない。われらは文化の帰趨（きすう）に朝（ちょう）せんとして文化価値の実現を努むる人格として生きんとするのである」といって、文化生活の水準に登らない孤立無理想の生活を批難されましたが、最近の婦人運動には、この厳粛なる批難の前に撤廃するか、もしくは開眼を施すか、いずれかの勇断を要するものが多いように思います。

*

もしそれらの先輩婦人たちが早く文化生活の意義に

通じておられたならば、その一々の社会的行動は、文化価値実現の理想を標準として批判され取捨されて、残るものはすべて文化運動の体系に繋（つな）がることが出来たでしょう。のみならず、現在の日本において、同じ文化運動でも、その本末と、軽重と急不急との序次を考察して、大局に関係するものを先とし、局部的なものを後廻しにするだけの用意があったでしょう。

　しかるに、未来の生活理想に自覚を欠いた先輩婦人たちは、すべて因習に妥協し現状を維持する気分の中に、大した煩悶（はんもん）もなく住んで、名は改造といっても、その実際は何物も破壊せず、何物も創造せず、在来の

範囲で単に無用の「置き換え」を試みて、それを婦人の活動と曲解されているに過ぎないのです。従って、その運動は前に挙げたような物質主義、功利主義、非人格主義の軽躁膚浅な行動に停滞しています。それらの婦人たちは、工場婦人の倫理問題、衛生問題、労働時間制限問題、賃銀値上げ問題、夜業禁止問題等についても、また国際労働会議における日本の婦人労働顧問の人選などについても、何らの動く所がありません。労働者の同盟罷工や怠業が如何に起ろうとも、信友会の印刷女工たちが如何に炊き出しをして組合の同盟罷工に活動していようとも、それらの事件に対して全く

同情も声援を与えられません。有産と無産の階級闘争は既に我国にも爆発の端を示していますのに、それに対して何らの調節運動も促進運動も試みられません。それについて意見の発表さえもないのです。また町村会初め帝国議会に到るまでの政治機関から婦人を拒んでいることの不法を正すために、第一の必要である治安警察法第五条の撤廃と、婦人の参政権をも認容した普通選挙の要求の如き緊要な問題についても、それらの先輩婦人たちは全く冷淡に看過されています。また教育の方面でも、小中学より大学及び各種の専門学校に到るまでの男女の共学の問題の如きは、茲にならべ

た諸問題と併せて、男子と平等に文化生活の構成分子たる婦人の看過してはならないものだと考えるのですが、どの婦人運動にたずさわっている婦人たちも、文化生活の基本であるこれらの問題について新しい運動を起される気振（けぶり）さえありません。私たちはそれらの先輩婦人たちが虚礼廃止とか、廃物利用とか、混食や代用食の実行とかについて、私たち婦人のために最大級の激励を払われるのを見て、時には腹立たしくさえ感じることがあります。

以上、いろいろと失礼なことを述べました。私はそれをお詫びすると共に、「婦人運動に理想あれ」という

希望の言葉を以ってこの感想を結びます。（一九二〇年二月）

（『雄弁』一九二〇年一月）

底本：「与謝野晶子評論集」岩波文庫、岩波書店
１９８５（昭和60）年８月16日初版発行
１９９４（平成６年）年６月６日10刷発行
底本の親本：「女人創造」白水社
１９２０（大正９）年５月初版発行
入力：Nana ohbe
校正：門田裕志
２００２年５月14日作成
２００３年５月18日修正
青空文庫ファイル：

（http://www.aozora.gr.jp）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。